

唐代小説離魂記考

内山知也

一、まえがき

私が今とりあげようとする、唐代小説「離魂記」は、「太平廣記」卷三五八・神魂一に「王宙」と題して收められ、末尾に「出離魂記」と注されている作品を指す。それは、本文の總字數がわずか五百字（そのうち衍文とみられるもの九字——江璧疆「唐人小説」による——を含めて）の、きわめて短い物語であるが、それでいて、讀者の心を打つ美しい作品である。

この短い物語は、唐代においては、單行されていたものと、晩唐になつて、陳翰の「異聞集」に採録されたものとの、二本があり、宋初編集の「太平廣記」には前者が收められ、南宋の曾慥の手になる「類說」卷二十八や、皇都風月主人編の「綠窗新話」卷上には、後者が收録されたと考えられている。（註）後者の文章は、前者に比較して、省略が多く、テキストとしては劣るものである。元に至ると、この物語によつて、鄭德輝が「迷青瑣情女離魂」雜劇を作つたので、倩女・王生の名は不朽なものとなつた。さらに明代には、徐應秋の「玉芝堂談薈」卷六に收められ、清朝には「龍威秘書」四集や「唐人說薈」などの集に入れられ、やがて、民國十五年鄭振鐸の「中國短篇小説集」第一集以後、魯迅の「唐宋傳奇集」、汪璧疆の「唐人小説」などの、唐代小説專集には、必ずといつてよいほど、收載されるようになった。

しかし、「離魂記」が、單なるストーリーの紹介だけでなく、文學史家によつて、相當の評價を得るようになったのは、比較的最近のことである。一九五五年、李長之は「中國文學史略稿」第三卷において、「離魂記」を次の三つの點か

ら評價した。すなわち、(1)技巧のとりたてて言うべきものがなく、初期的作品の色彩を帯びている。(2)家父長が娘の結婚を決定する結婚問題を描き、それに反抗するという積極的な意義をあらわしている。(3)物語中の魂に關する觀念は、疑いもなく民間傳説によるものだ、と述べる。李長之のいう「初期的作品」とは、「離魂記」の本文にあるとおり、この作品の成立年代を、大曆末年(779)ごろと考え、物語描寫の簡潔さという點から、それを決定つけようとした言葉のようにとれる。

つぎに、昭和三十九年、近藤春雄氏は「唐代小説について」で、(1)「離魂記」のテキストは、單行本を収録した「太平廣記」の系統と、「異聞集」の系統の二種類がある。(2)「離魂記」は奇を出すための作で、張鎰一族を陥れるためであるとは考えられない。(3)この作は、思うてやまない男女の愛情を謳歌したもので、離魂のことは、それを強調するための工夫であつたと考えられる、と、ほぼ三點を主張される。

李長之が(2)(3)で主張したことを、近藤氏が(3)で一層發展させてとらえ、物語の主題として強調されたのは、大きな進歩であるというべきであろう。小論はここに一つの出發點を置いて考察を進める。しかし、李長之の(1)の點と、近藤氏の(2)の點については、なお考える點がある。そこで「離魂記」がふまえる説話的話根の本質、物語にとり扱われる時代の正確性、および登場人物の考證、唐代銓選制度から見た登場人物の行動、などの諸點について検討し、そこからもう一度主題に肉迫し、作品の價値を論じたい。

二、離魂の話根について

李長之の(3)の説や、近藤氏の(3)の指摘のように、肉體から魂が遊離して、想う所に赴いてゆく、という形の信仰は、中國に古くから傳わるものである。

少し大膽な言いかたかもしれないが、思うに、晋以前の中國人の魂に對する興味は、主として、人間の肉體および精神における魂の位置とか、機能についての方向に向つていたようであり、また、肉體の死滅後の、その歸趨の方向にあつ

たようである。そして、民間信仰や禮法の面では、死者の肉體から離れた魂を招くという所にあつたようである。^(註2)

ところが、晉のころから、生きた人間の魂魄が肉體から分離することを述べるようになってくる。例えば、「抱朴子」(晋・葛洪)卷二論仙には、

人は賢愚有れども、皆己が身の魂魄有るを知る。魂魄分れ去れば則ち人病み、盡く去れば則ち人死す。故に分去には則ち術家に拘録の法有り。盡去には則ち禮典に招呼の義有り。^(註3)

と述べているが、もう晋以前に、魂魄が別れることによつて生じる病氣を治療する道術(拘録の法)——鬼神を使役する法——が民間に行なわれていたことを、それは示している。説話にも、「搜神記」(晋・干寶)の「無名夫婦」(「太平廣記」卷三五八)の説話や、「異苑」(宋・劉義慶)の「庾寔」(「太平御覽」卷八八六)の説話のような、肉體から魂が離れ去ると、その人はやがて死ぬというモチーフを持つ作品のあることが、そのことを裏書きしている。

またさらに、「幽明録」(宋・劉義慶 403~444 AD)の「龐阿」(「太平廣記」卷三五八)の物語になると、説話からの飛躍が見えてくる。女主人公石氏の娘の魂は、肉體から離れて、想う男龐阿のところへ通いつめるのであるが、石氏の娘はそれによつて死ぬどころか、かえつて、阿の嫉妬ぶかい妻の急死の後、阿とめでたく結ばれるという團圓になる。この物語の石氏の魂は、彼女の夢の中の魂らしいから、本質的には離魂の話根と異つていて私は考えるけれども、この物語の文中に記された、離魂の動機が思慕の精情の激しさであるという著者の記述は、非常に重要なものであると思われ。^(註4)

夫れ、精なる情の感ずる所、靈なる神はこれが冥き著はれを爲す。滅えし者はけだし其の魂神ならん。^(註5)

と、しばしば阿の家に赴いては縛られ、そして不思議に消えていつた、石氏の娘の夢の中の魂のことを説明している。

唐代に入ると、この種の物語は、分離した魂が、再び肉體に歸つてくる場面に、クライマックスを持つとうとする。「靈怪録」の「鄭生」(「太平廣記」卷三五八)の物語は、そのいみで、「離魂記」とはなはだ類似した話根を持つ作品である。プロットを區切つてみると、(1)主人公鄭生は、科擧の試験に上京する途中、偶然に宿つた家の主婦の外孫(他家に嫁いだ

娘の子) 柳氏(實はその魂)と、その夜すぐ婚禮をする。(2)そのままそこ(鄭州の西郊)に數か月住んで、大した理由もないのに、妻の實家、淮陰縣令柳の家に里歸りする。そこで柳氏の魂が肉體と合致する。(3)不思議に思つてわけを調べてみると、柳氏の祖母(宿の主婦)は亡靈であつて、鄭生は、その亡靈によつて柳氏の魂と結婚させられたのであつた。鄭生が再び以前の場所を尋ねてみると、全くあとかたなくなつていた、というふうになる。ところで、この物語の持つ幾つかの不合理な點、不鮮明な點——例えば、(1)は、當時の士人の結婚禮法に外れるものだし、(2)は、讀者に對する説得力に缺けるし、(3)は、もとの宿の主人や婢の始末、および亡靈と離魂が鄭州に行つていなければならない理由、鄭生と柳氏が結ばれなければならない理由の説明に缺ける——が、この物語を志怪的な作品にしているのであつて、著者の志向は、まだ奇怪なことがらを記そうという興味の中に埋没していた、とすることができよう。

この「鄭生」に比較すると、「離魂記」は、モチーフの上に離魂の話根がしぼられており、魂の分離合一という話根をとり外せば、完全に美しい戀愛物語となりうる。それはたしかに、奇怪な事件をクライマックスに語つていられるけれども、「龐阿」の物語に見え始めているような、女性の激しい思慕の精情の強調のために、その話根は敷設されているにすぎない、とすることができよう。

離魂の話根は、さらに、「獨異志」(晚唐・李元^(註6)もしくは李元^(註6))の「韋隱」(「太平廣記」卷三五八)の物語に、そのまま受けつがれているもの、すでに愛情の強さを訴えようとする精神が衰弱してしまつていて、それは全く魅力に缺ける作品になつてゐる。

離魂の話根とは別に、睡眠中に夢魂が肉體から離れ、さまざまな行動をするという話根が古くからあつたこと(註7)は周知のことである。「類説」や「綠窗新話」に收められた「離魂記」——つまり「異聞集」系のテキスト——が、その物語の末尾に、「太平廣記」本にない、次のような説明をつけ加えていることは興味深い。

女曰はく、實に身の家に在りしを知らざりき。初め、宙の恨みを抱いて去るを見、某^(註8)睡中を以て、愴惶として走りて

宙の缸かまに及べるも、また去りし者の身みたるや、住とどまれる者の身みたるやを知らざりき。

と、倩娘の告白をのせるも少し前に、

鑑曰はく、宙の行まりてより、女言もつこはず、常に酔よへる狀の如し。信まことに神魂まごたまの去りたるなるを知れり。

と、張鑑のことはをのせる。

鑑のことはには、離魂の話根の様相が露呈しているのに對して、倩娘のことはには、やや夢遊の話根への傾斜を見ることのできる。おそらく、單純な離魂の話根が、唐末に及ぶうちに、夢遊の話根と説話的習合を起そうとしたのであろう。離魂の話根は、かつて信仰として、それ自體が現實であると信ぜられたまま、奇異そのままの形貌で用いられるから、比喩的手段としては生一本すぎて遊びがない。それに比べると、夢魂（夢遊）の話根は、先秦時代より、長くかつ安定した文學的素材としての生命を持ち合わせており、今日われわれが感じるほどの不自然さを、當時の讀者には與えなかつたらしい。唐代小説にも、虚構の手段として、しばしばそれが用いられ、覺醒してから現實にたちもどることによつて、テーマを強調しようとしている。そのような意味で、「離魂記」は、これまでの離魂の話根を用いる小説でたつた一つの成功作品と言ふことができよう。

なお「新唐書」藝文志には、戴少年「還魂記」一卷の名が記録され、少年は「貞元の待詔」と注されている。「全唐文」卷七二〇の戴少年の説明によると、「少年は、元和初、官は待詔なり」とあり、「鎮國大將軍王榮神道碑」一篇を遺すだけで、現在「還魂記」という作品を見ることはできないが、額名の似通つた單行の作品が、中唐のころあつたということに興味深い。

三、天授三年と大曆末年について

「離魂記」の物語は、「天授三年」という則天武后の年號(693)から始まり、「大曆末」つまり、代宗の大曆十四年(776)

る。

この「天授三年」という年號が、次の文の「清河張鎰、因官家於衡州。」に繋つて見ると見ることが誤りではないだろう。そしてその時、張鎰の娘倩娘は「端妍絕倫」であり、王宙も、「幼にして聰悟、美容範」たる男だつたのだから、少く見積つても十歳は過ぎていことになるだろう。その後「後におのおの長生す」とあるから、その程度の年齢と見るべきであろう。

さて、この物語を傳えた張仲規という人物は、本文の敘述によると、「鎰は則ち仲規の堂叔なり」というのであるから、張鎰の父、すなわち倩娘の祖父は、張仲規の祖父の弟に當るわけであり、讀者としては、仲規は倩娘と同世代であり、むしろ年長者と印象づけられる。そうすると、かりに天授三年(896)に十歳であつたとしても、大曆十四年(779)ころには九十七歳の老人に仲規はなつていなければならない。

このように「離魂記」は、ひどく無理な時代設定を試みているのであつて、この二つの年號による時代設定は、何かの理由による、假構であると考えられる。

四、張鎰について

「離魂記」は、社會學的な見方をすれば、家庭問題、特に一人娘の私奔を取扱つている。唐律によれば、「もろもろの姦する者は、徒一年半」(雜律第二十二條)であり、「もろもろの逃亡の婦女を娶りて妻妾と爲す、情を知る者も、ともに同罪」(戶婚律第二十六條)であり、また深夜、逃亡したことは、「もろもろ夜を犯せるもの、笞二十」(雜律第十八條)といった刑に該當するはずであり、また特權によつて免れたにせよ、そのような事件をしでかす娘を持つことは、ひどく不名譽なことにちがいない。それが名門の子女であればなおさらのことである。したがつて、物語の作者は、「其の家、事の不正なるをもつて、これを祕す」と述べている。「不正」というのは「まともでない」「奇怪だ」という意味のようであつて、刑法にふれるという意味ではないけれども、祕密にされた原因は、やはり正當な結婚儀禮によらなかつた

私奔事件を意識するからと見なければならぬ。

現今の讀者は、物語のことがらだけを重視しがちである。しかし、唐代の特に閉鎖的な讀書人階級においては、その物語の主人公の身分、家がら、業績はひどく注目すべきものであつたと考えられる。

ところで、現在、われわれは、物語の冒頭に現われる張鑑という名を讀む瞬間、彼が「孟子音義」の著者であり、徳宗時代の宰相であつたことに思い當るのであつて、天授三年に衡州の役人であつた張鑑などという人物は扱しても見當らないのである。もし、この物語が、大曆末年に書かれたとしたら、當然そのころ官界に大きな勢力をもつていた、實在の張鑑に激しいショックを與えずにおかなかつたであろう。しかも物語の文中の張鑑に関する描寫は僅かだけれども、現存の史料に傳わる張鑑の風貌にたいへん似通つて描かれているからである。

「舊唐書」卷一二五張鑑傳、および「新唐書」卷一五二張鑑傳によれば、おそらく、彼は大曆末年に、江南西道都團練觀察使洪州刺史兼御史中丞であつたろう。彼はやがて、徳宗の建中二年(811)には、中央に召されて、中書侍郎平章事集賢殿學士修國史になる。

「離魂記」に、「清河の張鑑……性簡靜にして知友寡し。」と彼の性格を描寫しているのは、一見ストーリーとは無關係にみえる。しかし、この記事は、當時實在した張鑑に照し合せてみると、たいへん意味のあることであつた。

張鑑は、「新唐書」卷七二宰相世系表によれば、吳郡の張氏の出身である。遠祖は梁の零陵郡太守張紹、その孫後胤は國子祭酒新野康公となつた。後胤の孫義方は邢州刺史、義方の子、すなわち鑑の父は齊丘で、朔方節度使東都留守になつた熱心な佛教信者であり、郭子儀は彼の部下であつた。張鑑は門蔭をもつて左衛兵曹參軍を授けられ、郭子儀の判官となつてから、乾元の初(768)殿中侍御史となつた。しかし盧樞をかばつたことから、撫州司戸に左遷、まもなく晋陵令に移され、洪吉觀察使張鎬の判官となり、屯田員外郎、祠部・右司員外郎を経て、大曆五年(770)濠州刺史に除せられた。

こういふ名門出身の人物であつた張鑑の人がらについて、「舊唐書」は、「交遊雜ならず。楊綰・崔祐甫と相い善し。」

と記し、「新唐書」は、「母の喪に居るや、孝を以て聞ゆ。妄りに交遊せず。ただ楊綰・崔祐甫と善し。」と記す。清廉な名士でなければ交際しない、氣位の高い、學者風の生活態度は、物語の張鑑と一致する。

さらに、張鑑の知友崔祐甫と楊綰をみると、そこに類似した性格を發見する。「舊唐書」卷一一九崔祐甫傳、「新唐書」卷一四二同傳をみると、祐甫は、「家、清儉禮法を以て、士流の則となる。」といった人物であり、また「舊唐書」卷一一九楊綰傳、「新唐書」卷一四二同傳によると、楊綰の祖父も父も儒者として高名があり、綰も、「長ずるに及んで學を好んで倦まず。博く經史に通じ、九流七略、該く覽ざるはなし。尤だ辭に工みにして、藻思清瞻にして、文理を宗尙す。沈靜寡欲、常に一室に獨處し、經書を左右にし、凝塵席に滿つるも、澹如たり。光を含み用（明？）を晦まし、名の彰はるるを欲せず。毎に文を屬るも、自由を恥ぢ、知己に非ずば得て見るべからず。早に孤、家貧しくして母を養ひ、孝を以て聞ゆ。」と記されるような學者であり、孤高な人物であつた。

この二人を友人とする張鑑自身、すぐれた儒者であつた。同じく「舊唐書」の傳によれば、「大曆五年、濠州刺史に除せらる。政を爲すこと清淨、州の事大いに理まる。乃ち經術の士を招き、生徒に講訓す。郡を去るころ、明經に升る者四十餘人なり。「三禮圖」九卷、「五經微旨」十四卷、「孟子音義」三卷を撰す。」と、彼が門弟を指導し、著述に勵んだことを述べている。

さて、物語に、張鑑が、

子無く、女二人あり。其長は早に亡く、……

とあるのは、本紀および列傳に、建中四年（883）十月壬子、李楚琳の反亂のため、鳳翔で彼の二子と共に捕えられ、殺害されてしまつて、ついにその後繼者がなくなつたことを記しているのと、結果的には同じなのである。

以上「離魂記」の作者が、實在の張鑑に物語の素材を得ているらしいことを、一、二の例をあげてのべた。

しかし、實在の張鑑は衡州には赴任しなかつた。このことはどう考えたらいいのだろうか。それには三つの點からヒン

トが考えられる。(1)衡州 (xang tsien) が、實在の張鎰の赴任先潁州 (xau tsien) や洪州 (xung tsien) の音に似ていること、(2)實在の張鎰の先祖が零陵の太守で、衡州はその支配下にあつたこと、(3)衡州は唐の衡州 (湖南省) でなくて、南朝の衡州 (廣東省) であり、そこは始興の張氏の根據なので、わざと昔の名稱を用いた。この三點のうち、最も興味深いのは(3)である。というのは、この物語を傳えた張仲規という人物の着想が、始興の張氏から得られたのではないかと思われるからである。張仲規については次に述べる。

五、張仲規について

「離魂記」には、この人物を、大曆末年の萊蕪縣令であり、張鎰はその堂叔に當り、この事件をよく知つていた、と述べる。

まず規という字は「康熙字典」「大漢和辭典」にも見えないから、おそらく何かの字の誤りと考えられる。

張氏で、仲の字をその名の上に持つ者を輩出しているのは、「新唐書」宰相世系表によると、それは、晋の張華の後裔、始興の張氏である。「舊唐書」卷九九張九齡傳によれば、「曾祖君政、詔州別駕たり。因つて始興に家す。今曲江の人と爲す。」と彼の先祖が廣東省始興に住んだので、始興の張氏の名が出たことを記している。その九齡——玄宗の宰相となつた人——の世代の孫に當る男子に、三十七名もの仲の字を持つものがあり、この世代の代表的な人物、祕書監曲江成伯となつた張仲方 (xung tsang) がいる。その始興は、六朝のころ東衡州と呼ばれたところであつた。張仲規という人物や、衡州という土地を考え出した物語の作者は、おそらく始興の張氏を念頭に入れておられるらしいことを私は想像する。張仲規が、もし張仲方の世代の實在の一人だとしたら、大曆末年に萊蕪縣に縣令として實在することは可能であらう。しかし、張鎰は彼の堂叔とはなりえない。

張仲規の在任した萊蕪縣 (山東省) は、長安四年 (武后・70) から、元和十五年 (憲宗・820) まで、および、太和元年 (文宗・827) 以降、縣として置かれた。だから大曆末年に萊蕪縣令という職は實在しえた。そこは、鐵銅錫の産地であつ

た。

物語の性質上、讀者は、張鑑の實在性を考えると同時に、張仲規の實在性も重視するであらう。しかし、現在彼のことを確かめる資料はない。ただ、彼が始興の張氏一族に示峻を得て登場した人物らしいことを指摘するに止める。

六、王宙について

張鑑の外甥王宙、本籍は大原。この人物は、倩娘と共に最も仮構性の強い人物である。試みに「新唐書」宰相世系表の大原の王氏の系圖を見ても、それらしい名は見當らない。ただ京兆の王氏の出身で、蒲州刺史となつた王慶の、孫たち、つまり、武後の進士で揚州刺史となつた易從の子、賓、寔、宥、密、定、および易從の弟右庶子敬從の子、寥、同じく弟で武後の進士麗正殿學士擇從の子、察らが、すべてみかんむりの名を持つている。その中で、字形の似通つている王定(?<王定?)は、權德輿の「故太子右庶子集賢院學士贈左散騎常侍王公神道碑銘并序」(「全唐文」卷五〇〇)によれば、前夫人は京兆の韋氏、繼夫人は隴西の李氏であつて、張氏ではない。この王氏一族は、「舊唐書」卷一七八王徽傳によれば、易從以降、大中(宣宗・懿宗)時代までに、進士に合格する者十八人、牧守の賓佐を歴たもの三十餘人と傳えられ、その名勢を天下に馳せた。

外甥とは、他家に嫁した姉妹の生んだ男子を呼ぶ言葉であるから、王宙の母も張氏でなければならぬ。仮に王宙が王定であつてもその父王易從の夫人の姓を知ることがは現在できない。

前にも述べたように、王宙という人物は仮設の人物らしい。そのヒントとして、「集異記」(唐・薛用弱)の「張鑑」(「太平廣記」卷二七八)という物語に、外甥李通禮という博學善智の人が、張鑑の夢解きをして、彼が間もなく宰相に任ぜられることを豫言することが述べられている。この物語は、大暦年間に、代宗の寵愛深く、宰相に任ぜられるところの張鑑を描くのであるが、すでに史實とは異つていて、彼が宰相になつたのは徳宗の建中二年であり、そのすぐ前は、この物語のように工部尙書判度支などではなく、汴滑節度觀察使汴州刺史兼御史大夫から病を得て私宅で療養中であつた。こ

ここに現われる外甥李通禮という人物の實在性を考えることは、王宙の實在性を考えるよりも、もつと愚なことではなからうか。というわけは、當代きつての大儒者の風貌を持ち、對面を重んじた彼が、夢解きの、こじつけめいた説明を、喜んで聞いたなどは、とうてい考えられないからである。

ただ、「離魂記」の王宙、「張鑑」の李通禮の存在を通じて考えられることは、張鑑という人物の側近には、外甥の王なり李なり、また他の誰かが常にいて、その聰明さと學識を愛されていたということである。彼の傍には、青年時代に強い感化を受け、彼と行動を共にし、深い信頼を得ていた人物が存在したことを、これらの物語は、側面からわれわれに告げているのではなからうか。事實、その青春時代、濠州において教えをうけ、洪州や鳳翔へとその行を共にし、ついに鑑の非業の死の當日まで、「驢に斬あるごとし」といわれるほど、忠實な幕僚だつた、齊抗のような人がいたことは、まがいもないことである。(註9)

七、選と主人公について

倩娘離魂の動機の一つは、張鑑の心變りにある。もう一つ、直接の原因は、王宙の出發である。二人の男の心を動かしていたものは何だらうか。「離魂記」はそれを詳しく記さない。張鑑は、娘を王宙に興えると日ごろ口にしていながら、「賓寮之選者」から求婚を受けると、そちらに鞍がえしてしまふ。王宙は失望と恨みにうちひしがれながら、「當調」ということを口實に、倩娘や張鑑のところから遠ざかるうとする。

張鑑の娘に對する愛情は、「選」という制度を通して、婿えらびを決定させ、失戀した王宙は「調」という制度に逃避の場所をみつけた。

ところで、「賓寮之選者」と「當調」の解釋は、必ずしも明瞭ではない。

「賓寮之選者」について、鹽谷溫氏は、(註10)「賓寮」は「部下の吏員」、「選者」は「選拔せられて官を授けられし者」と譯し、人民文學社刊「唐宋傳奇選」の注は、「幕僚裏將赴吏部選官的人」、つまり、「幕僚中吏部にゆき官に選ばれようと

する人」の意味にとる。前野直彬氏(註11)は「幕客の中で官吏に採用された人」と譯す。前野氏の譯は、鹽谷氏の譯とほぼ同じである^(註12)と見てよい。

「賓寮」の解釋には三者に異論はない。問題は「之選者」の三字である。思うに、鹽谷氏の讀まれたような「選者」という熟語は、官人の銓選のさいには用いられないようであつて、そのようにみには「選人」というのが普通である。また、「選」を「選部(吏部)」と解釋する人民文學社版「唐宋傳奇選」の解釋も、やゝ窮窟である。吏部といわない時は「選部」「選曹(銓曹)」というのが普通である。

章羣氏の「唐代考選制度放」によれば、唐制では、六品以下の官は、四年で任期が満ち、官をやめる。やめた後、上京し、吏部で前任地での業績をしらべ、再び官を興える。それが選であり、選は毎年行なわれることをたてまえとするが、實際は行なわれないこともあつた。すぐ新しい官につけない場合は、數年の選を待たねばならない。また禮部の試験(科擧)に及第した者も、その年に官職につけないときは、數年の選を待つ。當時、官をやめた選人は、大抵、京において選を待つたので、その弊害は多かつた(註14)という。「太平廣記」に収録されている、多くの選人たちの物語——少しでも有利な、新しい官を得ようとして京に集まつた人たちの物語は、章氏の説の妥當性を證明している。

したがつて、「賓寮之選者」は、「幕僚で、任期が満ちて衡州での官をやめ、長安に赴いて業績の考査をうけ、次の授官を待機しようとする人」のいみにとるべきであらう。しかし、「之」を「往」くのいみにとるのは、やはりぎごちなく感ずる。普通、選に行くときは、「赴選」とか「參選(註15)」のようにいうようである。しかしこの文ではそう讀むのもやむをえないであらう。

つぎに「當調」について考えよう。鹽谷氏は「調選に當ること、任官の意なり」とされ、「唐宋傳奇選」は、「應該調任官職」つまり「官職を轉任することであらう」と譯す。前野氏は「職をさがすこと」と譯される。三者は三様の解釋を提出しているのである。

「唐會要」「太平廣記」などを捜しても、「當調」という熟語にはなかなか見つからない。それに類似したことは當つてゆくと、まず「調選」^(註15)「選調」^(註17)という熟語に注目される。このばあい、「調」も「選」もほぼ同義であると思われる。また、「太平廣記」卷一四八「鄭虔」の物語には、「後七年選授衢州信安縣尉」という文と、「後七年調改衢州信安尉」という文が、等價の文として用いられているので、「選」も「調」も同義に使用されていると考えられる。また、その他に、「調授」^(註18)という熟語も使われ、「選授」と同義のように思われる。

選のために京に集まることを「選集」^(註19)もしくは「調集」^(註20)といったことを文献は語っている。選が調と同意義に使われているとすれば、「當調」という語は、「當選」と等しくなければならない。

「太平廣記」卷一四九の「馬遊秦」という物語に、

吏部令史馬遊秦、開元中、以年滿當選、時侍郎裴光庭以本銓舊吏、問其所欲。……

と記している。そのいみは「吏部令史の馬遊秦が開元年間に、任期が満ち、選の時期になつたので、當時の吏部侍郎裴光庭は、前任の官吏の業績の選衡に當つていたから、馬遊秦の希望をたずねた。……」となる。同じ吏部の中で情實をきかせようとしている場面であるが、この「當選」といういみが、「新しい官を授ける前の選衡の時期になる、」という意味、もしくは、「選衡になる、」という意味であろうことは、前後の文章で明らかである。

要するに、物語や史料には、「選」も「調」も同様に用いられ、それは、まだ新しい官が授けられない選衡の状態を示すことばであり、前に送ったような制度をいうものである。そして「選」または「調」は、科擧合格者が官を授けられようとするとき、あるいは前官人が再び官を授けられようとするとき、共に用いるものである。^(註21)

このように解釋すると、張鎰は、これから長安にゆき、近い將來中央か、それに近いところに、今より高い官職を與えられそうな、彼の幕僚に、倩娘を嫁がせようとしたことになる。しかし、なぜ彼の愛する外甥を疎外したのだろうか。おそらく、物語に書かれない詳しいところは、賓僚の方が官位がやゝ高く、將來有望であるという張鎰の見通しがあつた、

と語られたのであろう。「請赴京。止之不可。遂厚遣之」という物語の文章によれば、王宙がいつまでも衡州にとどまっていた豫想が張鑑にはあつた。とすれば、王宙は、科擧に合格したけれども、まだ張鑑配下の地方吏にすぎず、官位はなかつたと考えるべきかもしれない。家人が、二人の相思の仲であることを知らなかつた、疎忽さが、二人の仲を裏く原因になつたという、物語が述べる動機は、最も中心のものであるに違ひなからうが。

つぎに、物語によると、王宙と倩娘の間に生まれた二人の男の子は、孝廉の資格で、進士に合格し、丞・尉になつたといふ。(註22)孝廉擧は寶應二年(763)に楊綰の奏によつて設けられ、建中元年(780)まで(註23)続けられたから、あるいは、私奔の結果生まれた子供たちが、「郷閭に在りて、孝悌廉恥の行ある一ものとして推薦されたことを問題にしたかつたのだと見ることができるかもしれない。しかし著者のこの事件に對する意識は、私奔を批判するところにはなかつた。彼の主眼は、近藤氏の言われるように、愛の精情の強調にあつたのであつて、このようにすぐれた子供を得たことも、愛を貫徹することによつてであり、彼の倫理觀では祝福すべき結果であつたのだと考えられる。

八、むすび

断片的に幾つかの考證を試みたが、「離魂記」は、ストーリー構成にはわりあい窮屈な離魂の話根を用いながら、愛情の強調に成功した稀有の作品である。簡潔すぎるほどの文章であるが、作者の意圖は十分に果されていると考えられる。登場人物の形象は、建中の宰相張鑑を中心として、その側近にあつた才子たちや、始興の張氏などから、得ているので、もし今までのように大曆末年の成立であるとみるならば、當時相當の反響があつてしかるべきである。しかし、その反應は全くないから、おそらく張鑑の歿後の成立と考えるのが至當であらう。従つて建中四年(784)以降の作品であり、沈既濟の「任氏傳」(825成立)よりも後とみるべきである。

作者の物語に寄せる浪漫性は、封建的道德律をのりこえて、封建的家庭の中についた、親の無理解による悲劇に、反撥し、成功した青年たちの勝利を描いている。束縛された女性を設定して、それからの救出を描こうとする「柳氏傳」「無

双傳」「崑崙奴傳」に比較すると、「離魂記」の作者は、女性を消極的なものとは見ず、男の愛に敏感に反應し、「大義を棄てて」も、男の愛に報いようとする、積極的な人間と見る。このような女性の形象は、「任氏傳」や「李娃傳」にも用いられるところである。作者陳玄祐を知る手がかりは何一つないけれども、始興の張氏一族を知る人物で、それを客觀視できる距離にあつた、おそらく若い士人だつたのであろう。

・ 1 近藤春雄氏「唐代小説について」愛知縣立女子大學紀要十四輯による。

ところで、「類説」所收の「離魂記」、「綠窗新話」所收の「張倩娘離魂奔塔」は、離魂の語根と夢遊の語根との習合が見られ、本來の「離魂記」の語根を逸脱しようとしている。かつストーリーは要約されている。

・ 2 「禮記」郊特牲は死後の魂魄の歸趨を述べ、「左傳」昭公七年の子產と趙成の魂魄問答には、人間の誕生に際して、魂魄が關與するところを述べる。「孝經援神契」(「太平御覽」卷八八六所收)は、魂魄が性情を支配すると説く。招魂の儀禮については、「儀禮」士喪禮や「楚辭」招魂などに述べるところで贅言を要しない。

・ 3 石島快隆氏譯註「抱朴子」岩波文庫本による。「太平御覽」卷八八六所引の文とやや異なる。

・ 4 高橋稔氏「六朝志怪における愛と死」中國文學研究第四號に、「龐阿」と「離魂記」の比較から、主題の發展の把握がなされてゐる。

・ 5 「靈怪錄」の編者は今明らかではない。「太平廣記」所收のすべて五編の作品についてみると、卷四五二の「王生」が、建中初年(780)を時代背景として最も新しいから、當然それ以降である。もし明鈔本・陳校本の「李令問」(卷三三〇)の注のように、「靈怪集」であるとしたら、その編者は張薦である。張薦は憲宗の諫諍大夫であるから、おそらく貞元年間(788~804)の編集であらう。しかし卷三七二「張不疑」は開成四年(839)の事件を扱う。明鈔本は、それを「博異志」と注するけれども。

・ 6 「獨異志」の作品は、「太平廣記」二七五編收められるが、その中で、王涯(760ころ~835)や李德裕(787~849)の物語を含んでいるから、おそらく晩唐(九世紀後半)の編集であらう。

・ 7 拙稿「唐代小説の夢について」中國文化研究會會報5の1参照。夢遊の話は、莊子や辭賦・詩などに頻用されている。

・ 8 「全唐文」卷四九九所收「唐故中書侍郎同中書門下平章事太子賓客贈戶部尚書齊公神道碑銘并序」による。

・ 9 「舊唐書」卷一三六齊映傳にみられ、齊映(748~795)は二十三歳のころ張楚の門に入り、進士科・博學宏辭科に合格した。建

中三年(823)鳳翔節度使張鎰の判官になり、張鎰の死の當日まで「白眉長大・音高朗」な容貌にものを言わせて活躍している。彼の妻は、かつての上官滑臺節度使令狐彰の娘であり、令狐彰は父源が范陽縣尉だったとき、幽州の人の娘と姦通して生んだ子である。(『舊唐書』卷一二四令狐彰傳による)節度使などがその幕僚に娘をめあわす事は中唐に多くあつた。

・10 國譯漢文大成「晋唐小說」による。

・11 前野直彬氏「唐代傳奇集」一による。

・12 「太平廣記」卷一八五、一八六(その大部分は「唐會要」の後世の抜萃)によると、「選人」の用例は、「張説」「唐皎」「鄭蕩」「張文成」「鄭情・崔湜」「杜暹」「楊國忠」「陸贄」「鄭餘慶」「崔安潛」の物語にみられる。

・13 「選曹」は「太平廣記」卷一八六「李絳」に、「選部」「銓曹」「選司」は「唐會要」卷七四・七五にみえる。

・14 韋羣氏「唐代考選制度攷」P46による。

・15 「赴選」の例は「太平廣記」卷一四九「李栖筠」、卷一五〇「道昭」にみえ、「參選」の例は、卷一八六の「薛據」「張爽」の物語にみえる。

・16 「太平廣記」卷一八五「裴行儉」(「唐會要」卷七五)にみえる。

・17 前掲「張爽」にみえる。

・18 「太平廣記」卷一五〇「劉逸之」にみえる。これらの場合「授」の方に意味上の重みがかかる。

・19 「唐會要」卷七五にみえる。

・20 「唐會要」卷七五、「太平廣記」卷一五〇「李揆」にみえる。

・21 前掲「李揆」のばあい、科擧合格者が官を得る例である。

・22 本文「孝廉擢第」に注して、「唐宋傳奇選」は、「以孝廉の資格、考取了進士。漢朝有郡國春擧孝廉這一科、這里以孝廉泛指州郡春擧應考的人。」として、孝廉擧が唐代に行なわれたことにはふれない。

・23 「唐會要」卷七六孝廉擧の條、および「太平御覽」卷六二九參照。

(大東文化大學助教)